



Title	職場におけるメンタリングがメンターの学習および仕事の有意義感に与える影響 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	林, 麗桂
Citation	北海道大学. 博士(経営学) 甲第14614号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82639
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Lin_Ligui_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経営学）

氏名 林 麗桂

審査委員	主 査	准教授	阿部 智和
	副 査	准教授	宇田 忠司
	副 査	教授	松尾 睦

学位論文題名

職場におけるメンタリングがメンターの学習および仕事の有意味感に与える影響

職場におけるメンタリングは、個人の学習およびキャリア発達を促すことを目的とした支援行動であり、企業の人材開発と技術伝承を進める上で重要な働きをすることがこれまで明らかにされてきた。しかし、従来のメンタリング研究は、①メンティのキャリア発達に焦点を当てる傾向にあり、メンターの視点からの検討が不十分である。特に、②メンタリングがメンターの仕事の有意味感に与える影響が検討されていない、③メンタリングの実施により、対人スキルや管理スキルを向上させることが確認されているものの、メンターたちの詳細な学習プロセスについては明らかにされていない、という課題が残されていた。こうした問題を踏まえ、本論文は、メンターが、メンタリング行動を通じてどのように仕事の有意味感を持つようになるのか、またいかなるプロセスでどのような知識やスキルを学習しているかについて検討することを目的としている。

本論文は、6章から構成されている。第1章では、研究の背景と問題意識、研究上の現状と課題、研究目的が述べられている。

第2章では、メンタリングに関する先行研究のレビューを通して、リサーチ・クエスチョンが提示されている。具体的には、メンタリングの概念、機能、測定方法を確認し、メンタリングの決定・結果要因を検討した研究をレビューした上で、「メンターは、メンタリングを通してどのように仕事の有意味感をもつようになるのか」「メンターは、メンタリングを通して、どのように知識やスキルを獲得しているのか」というリサーチ・クエスチョンが提示されている。

第3章は、調査設計の説明がなされている。本論文では定量的研究と定性的研究を組み合わせた混合法を用いていること、および、それぞれの調査手続きやデータ分析の方法が示されている。定量分析では、日本企業で3年以上の職務経験を持つメンター経験者309名を対象とした質問紙調査データを、共分散構造分析によって検討したことが述べられている。定性分析では、日本企業において、新卒1年目社員に対するOJT (on-the-job training) 担当者またはメンターとして活動した経験のある社員・職員103名を対象とした自由記述式調査

が実施され、調査データはグラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析されたことが述べられている。

第4章は、定量分析の結果を記述している。具体的には、①キャリア・メンタリングは、仕事の有意味感を媒介してワーク・エンゲージメントにポジティブな影響を及ぼしていたこと、および、②学習志向は、キャリア・メンタリングや仕事の有意味感を媒介して、また直接的にワーク・エンゲージメントを高めていたことが明らかにされている。

第5章は、第4章での分析結果のさらなる検討を目的としている。具体的には、メンターのメンタリングを通じた学習プロセス、および学習が仕事の有意味感とどのように関係をしているかを定性的に明らかにすることに取り組んでいる。分析の結果、①メンタリング行動として、「仕事に関する指導」「心理的安心感の提供」「ロールモデルの提示」「仕事の意義の提示」という機能が確認されたことと、②メンターはメンタリング行動を通じて、自身の仕事を内省することで、知識や能力を獲得し、指導スキル・対人スキルを向上させていること、③メンターは、メンタリング行動を通じて、他者・組織・社会に貢献していることを認識するとともに、自らの仕事の意義を再考し、成長を実感していることが報告されている。

第6章では、定量分析および定性分析によって明らかとなった発見事実、理論的・実践的インプリケーション、今後の研究課題が議論されている。

審査の結果、本論文の主たる貢献は次の2点であることについて合意が得られた。第1に、メンタリング行動がもたらす効果を、メンターが知覚する仕事の有意味感および学習の観点から明らかにした点である。第2に、メンタリング行動によって喚起された内省が、学習や仕事の有意味感を促進する上で重要な働きをすることを特定した点である。これらの発見は、メンターの視点からの分析が不足していたメンタリング研究に対し大きく貢献するものであると考えられる。

ただし本論文は、次に挙げる2つの課題が残されている。定量分析と定性分析のモデルのさらなる接合を図るために、それぞれのモデルの変数を吟味し、統合を図る必要がある。また、定性分析で用いられている自由記述式調査によって得たデータを補完するべく、聞き取り調査を今後実施することが求められる。

しかし、これらの問題は定量分析と定性分析を組み合わせる混合法、および自由記述式調査を用いた研究において生じやすい問題であり、メンタリングの効果をメンターの視点から検討した本論文の成果は高く評価されるべきであると考えられる。

以上の点を踏まえ、本論文は、学術研究として高い水準に達しており、審査員全員一致で、博士（経営学）の学位を授与するに値すると判断した。